

冷戦期における挑発と 工作活動から見る北朝鮮の本質

荒 木 和 博

(拓殖大学海外事情研究所教授
特定失踪者問題調査会代表)

1、はじめに

本稿は日本からの解放(ソ連による占領)以降一九八〇年代までの北朝鮮による対南・対日工作と挑発活動を中心に概観し、北朝鮮という国家の本質の一端を導き出そうとするものである。

対外、とりわけ敵対国に対する情報・工作活動は一般にどの国でも行うことであり、北朝鮮の特徴は工作機関による外国の一般民間人の拉致である。特別な目的で相手国の要人等を拉致するのは例えばパナマ侵攻のとき一九九〇年一月に米国が行ったノリエガ將軍拉致をはじめ公然・非公

然に行われているが、一般民間人を個別に工作機関が拉致するというケースは類例を見ない。もちろん非公然のケースが多いことを考えれば筆者が知らないだけかもしれないが、少なくとも長期間かつ大規模に行ったという意味では北朝鮮だけではないか。それは、拉致が果して何の効果をもたらして行なったのかという疑問を抱かせるものである。

また、後述する一九六八年一月二十一日の韓国大統領官邸襲撃未遂事件や同年十月十一月の東海岸へのゲリラ浸透事件をはじめ北朝鮮の様々な挑発・工作活動を見ても、いかなる戦略のもとに行われたのか、理解に窮する事案が少なくない。この点は挑発の最大のものである朝鮮戦争自体についても言えるのだが、北朝鮮が膨大な人的・物的資源

を投下しながら効果がほとんど期待できない（というより期待していない）挑発・工作活動を続けた理由は何だったのか。

ここでは次のように仮説を立ててみたい。北朝鮮の挑発や工作活動は、特に朝鮮戦争での休戦以来本来の国家目標だった対南武力統一が不可能であるという現実の元、内向きの体制維持の手段であり、担当者の上部に対する忖度の手段だったということである。この点は筆者自身拉致問題に関わって30年近く、様々なケースを調べる中で感じてきたことでもある。それが明らかにできればわが国の対北政策・拉致問題への対応も別の視点から検証できるものと思う。

2、北朝鮮の政府樹立と朝鮮戦争

日本の敗戦は朝鮮半島にとって解放ではあっても独立ではなかった。それは解放が朝鮮民族自らの意志と力を主たる要因とするものではなかったからだ。この点は北朝鮮のみならず韓国でも歴史の中からはほとんど消し去られている。特に一九八〇年代後半の「民主化」以後、韓国では

一九一九年の三・一独立運動で上海に逃れた人々が立ち上げた「大韓民国臨時政府」がそのルーツであるとする主張が強く打ち出されるようになり、日本統治時代における朝鮮半島の発展（日本政府が行ったという意味のみならず当時の朝鮮人が努力したことも含め）は否定ないし過小評価されている。従って韓国では今も建国が一九一九年なのか大韓民国政府が樹立された一九四八年なのかで論争が行われている状態だ。

それでも韓国の場合は経済学史を専攻する学者・研究者などに日本時代の発展を直視すべきという主張があり、議論の場が存在するのだが、北朝鮮は全くの虚構の上に歴史を「創造」し、それ以外の見方を全て排除している。北朝鮮の憲法前文には以下の様に書かれている。

「金日成同志におかれては永生不滅の主体思想を創始せられ、その旗の下に抗日革命闘争を組織領導され、栄光ある革命伝統をお創りになり祖国光復の歴史的偉業を実現され政治・経済・文化・軍事分野で自主独立国家建設のしつかりとした土台を固めたことに基礎を置いて朝鮮民主主義人民共和国を創建された」¹

解放のとき金日成は三十四歳のソ連軍大尉であり抗日闘

争の業績と言えるものはほとんどなかった。北朝鮮の公式の歴史で赫々たる戦果として特筆大書している「普天堡（ポチョンポ）戦闘」ですら朝鮮と満州の国境の小さな町を襲撃しただけのものであることから明らかだ²。

そのような経歴の金日成を北朝鮮の指導者にしたのはソ連共産党書記長スターリンである。しかし解放後の北朝鮮には金日成をはじめとするバルチザン出身でソ連の庇護を受けていたグループ以外に朴憲永ら南朝鮮労働党系（解放前朝鮮半島内部で活動ないし潜伏していた共産主義者を中心とするグループ）、中国延安を拠点としていた金料奉・崔昌益ら延安派、ソ連共産党により派遣された朝鮮系ソ連人（カレット）の許哥誼らソ連派などの派閥があった。他派閥の中心メンバーは皆金日成より年長で闘争経歴あるいは学歴において優っていた。

したがって当時の金日成の権力はソ連の支持によってのみ正統性を保つことのできる脆いものであり、生き残るためにはスターリンに認められるだけの実績が必要だった。言うまでもなくそれは統一の実現である。しかし金日成にとって最大の実績作りを目指した朝鮮戦争は逆に朝鮮半島の分断を固定化し、さらにはその固定化の中で対南挑発・

工作活動それ自体が目的化していくのである。

金日成の第一の錯誤・米国は参戦しない

北朝鮮主導の統一を実現するための最大の障害は米軍の介入であった。金日成はこの最重要の問題で判断を誤る。一九四八年ソ連軍の撤退に続いて在韓米軍も一九四九年に撤退するが、両者で大きく異なるのはソ連軍が当時最新型の兵器を残していったのに対し、米軍は重砲・戦車等のいわゆる重火器を持ち帰ったことである。当時の米国は第二次世界大戦が終わり、招集していた兵士も復員が進んでいた時期で、「北進統一」を呼号していた李承晩大統領に引きずられて朝鮮半島の戦争に巻き込まれることを嫌っていた。結果的には巻き込まれたことを避けようとしたことが逆に朝鮮半島の軍事バランスを崩し金日成に開戦の決断をさせることになるのだが、当時はそこには思い至っていなかった。米国にとって朝鮮半島は、極論すればどうでも良い地域だったのだ。

この、「どうでも良い地域」という米国の認識に韓国が翻弄されてきたのは当然ながら、当の米国も大きな負担を抱え込むことになる。朝鮮戦争開戦の年である一九五〇年

一月、当時のディーン・アチソン國務長官の明らかにした米国単独の防衛線、いわゆる「アチソン・ライン」では朝鮮半島は除外されており、それは（もちろん時期的に考えればこの時点ですでに開戦準備の最終段階であったろうが）明らかに金日成の背中を押すこととなった。

韓国軍に重火器を供与せず、単独防衛線から朝鮮半島を除外したことで金日成は南侵をしても米国は参戦しないと確信を持ち、その確信に対して最終的にはスターリンも毛沢東も開戦を同意することとなる。ただしスターリンは開戦前に朝鮮人民軍にいた全てのソ連軍の軍事顧問を本国に帰還させている。それは開戦した場合捕虜になり、ソ連が参戦したとして米国に攻撃を受ける可能性を考慮したものであった。ソ連にとってもまた、朝鮮半島は対米戦を覚悟して守る程の価値のない「どうでも良い地域」だったと言えるのだろう³。この点は北朝鮮が国境の大部分を接する中国とは全く異なる点である。

現実には開戦直後米国政府は参戦を決断し、さらに国連安保理でソ連が欠席しているのを利用して国連軍の派遣を決定する。そして当初奇襲によって北朝鮮人民軍圧倒的優勢のうちに進められた戦争は約一か月で膠着状態になり、

九月からは国連軍・韓国軍側が攻勢に転じる。九月十五日の仁川上陸作戦で補給線が分断され人民軍は敗走を続ける。亡命政権になりかかった金日成を救ったのは十月下旬参戦した毛沢東の中国人民義勇軍であった。

金日成第二の錯誤・南の人民は呼応する

金日成はスターリンに対して南に行けば人民は直ちに呼応すると説明して開戦への了解を取り付けた⁴。しかし南侵は逆に南の国民に北朝鮮への敵対心、恐怖心を植え付け、統一をさらに遠いところに追いやってしまった。

当時南労党（南朝鮮労働党）系が韓国内で行っていた様々な工作・破壊活動は逐次金日成に報告されていた。大規模な暴動だけでも大邱暴動（一九四六年）・濟州島四・三事件（一九四八年）・麗水順天反乱事件（同）などの大きな暴動・反乱事件が起きていた。もちろん小規模の暴動やテロはさらに頻発していたが、南労党系としては少しでも自分たちの地位を高めるために報告を過大にしたと思われる。金日成からすれば南侵した途端に南の人民が歓呼して迎えるというイメージを膨らませたのではないか。上部に受け入れやすい情報のみが上がっていくことは北朝鮮でなくても普通に

見られる。朝鮮戦争でも国連軍最高司令官マッカーサーが中国軍の参戦について判断を誤ったのも同様の理由である。

南の民情を見誤ったのは最終的には最高指導者の責任だが、金日成は非を認めただけではない。逆に金日成は南労党系のリーダー朴憲永を米国のスパイとして捕らえ、休戦後に処刑する。当時勢力の大きかった南労党系を壊滅させる目的に加えて、過大な報告で判断を誤ったことに対する怨恨があつたのではないか。朝鮮戦争は現在北朝鮮では「帝国主義者とその傀儡の侵略から祖国を守った」として勝利したことになっているが、金日成は統一という最大の目的は果たせなかつたものの、これによって最大の敵対派閥を壊滅させることに成功した。

ところで朝鮮戦争前のこれらの暴動事件は結果的に当時の米軍政と政府樹立後は韓国政府による摘発・鎮圧を呼び込むだけであつた。麗水順天反乱事件は軍部隊の反乱だが、これには特に徹底した粛清が行われ、結果的に南における共産主義者の活動領域は大きく狭められた。韓国における政治外交史の泰斗李基澤・延世大学教授(故人)は筆者に「朝鮮戦争がなければ韓国はなくなつていた」と語つたことがある。米軍も撤退し、米国が事実上見捨てた韓国は放置し

ておけば自壊して北朝鮮に吸収された可能性があつた。しかし朝鮮戦争のために米国は参戦し韓国を支えることとなり、韓国国民にも反共・自由民主主義の大韓民国という国民国家意識が芽生えたということである。

さて、その後の北朝鮮は朝鮮戦争で目指した南朝鮮解放・南北統一を基本に金日成の錯誤をカバーすることを方針とした。すなわち①再度軍事侵攻した場合の米軍参戦阻止、②北朝鮮支持者を拡大し南朝鮮社会の分裂・混乱を醸成すること、である。

①のために必要なのはまず在韓米軍の撤退と対南武力侵攻の際の米軍の来援(それは大部分日本からであろう)を止め、あるいは遅延させることである。日本国内での工作活動は当初これを主たる目的として行われた。

②は前述のように朝鮮戦争によって韓国民の北朝鮮に対する敵愾心・恐怖心を喚起してしまつたため当初は極めて困難だつた。そこで使われたのが日本だつた。日本には公然と北朝鮮を支援する朝鮮総聯があり、またそれを支える日本社会党・総評系労働組合があつた。しかも一九七〇年代までは一九六〇年・七〇年の日米安保条約改定反対運動の余波もあり左翼的運動の基盤は今とは比べものにならない

いほど強かった。

また、一九五九年十二月に始まる在日朝鮮人の帰還事業は当時日本国内では左右を問わず大部分が支持をした。渡った人々から北朝鮮の情報が伝わるにつれて帰還者の数は二年後から激減していったが、それでもこの運動は北朝鮮のイメージアップにも効果的だった。一九六〇年に望月優子監督の映画「海を渡る友情」が製作されている。この映画は帰還事業を美談として扱っており、文部省推薦の教育映画だった。当時の世相の象徴とも言えるだろう。吉永小百合の主演で大ヒットした映画「キューポラのある街」(浦山桐郎監督)、その続編である一九六五年の「続・キューポラのある街 未成年」(野村孝監督)も主題ではないが帰還事業を極めて肯定的にとらえている。

この時期の雰囲気は当時を知る者でなければ分からない。正直なところ一九五六年生まれの筆者にも直接の記憶はない。しかし一九七〇年代までは「発展する社会主義国の北朝鮮、暗い独裁国家の韓国」というのが日本人の一般的なイメージであった。これは北朝鮮にとって極めて追い風となり、さらに後述するように帰還事業によって北朝鮮に渡った親族を持つ家族を脅迫して北朝鮮の工作活動への

「土台」を構築することもできるようになった。一九六五年に日本と韓国は国交正常化を行い、日韓の関係が強化されていくことは北朝鮮にとって打撃だったが、日本国内の一般世論に関する限り北朝鮮は優位に立っていた。

3、休戦後一九六〇年代までの対南挑発

ここで時代を少し遡って一九五三年七月二十七日の朝鮮戦争休戦後の対南武力挑発について概観してみたい。前述のように金日成は本来の戦争目的である南朝鮮解放を達成できなかった責任をとらなければならなかったはずだが、結果的にはこれを逆に利用して最大のライバルだった南労党系を粛清する。その後一九五六年八月にソ連派・延安派が反旗を翻す「八月宗派事件」で両派を除去、さらに一九六七―六八年の甲山派粛清によって金日成と対立する派閥は消滅した。この頃まで金日成は国内における基盤固めに重点を置いているが、その後対南挑発を活発化させる。代表的なものとしては一九六八年一月二十一日の朴正熙韓国大統領暗殺未遂事件と十一月の東海岸蔚珍・三陟へのゲリラ浸透事件がある。

前者は三十一人の北朝鮮武装工作員が休戦ラインを超えて大統領官邸（青瓦台）の北、北岳山まで迫ったもので、二十九人が射殺、一人が逃亡し、一人が逮捕されるという事件だった。逮捕された金新朝が記者会見の場で浸透目的を聞かれて「パクチョンヒ モガジ タロ ワッスダ」（北朝鮮の方言で「朴正熙の首を取りに来た」の意）と言ったことは休戦から十五年しか経っていない韓国民に再度戦争の恐怖を想起させることとなった。

後者は同年十一月に日本海側の蔚珍・三陟に武装工作員約一二〇名が浸透した事件で、目的は韓国内での拠点を作るためであったが、最終的には全て掃討された。この途中、中部に位置する江原道平昌郡珍富面の民家に押し入ったとき、李承福という小学校二年生の男児が「共産党は嫌いだ」と言って殺害される。

さて、この二つの事件は当時韓国民の北朝鮮への反発を強めただけで、北朝鮮から見た場合どのような戦略があったのかは見えてこない。前者はたとえ大統領暗殺に成功してもその混乱に乗じて人民軍が南侵するといった計画は存在せず、後者も武装工作員の大規模な侵入で拠点が築けると本当に判断したのか理解に苦しむ。

この浸透に対し韓国は“Tit for Tat”、つまり同じことをやり返す戦術をとった。軍籍のない人間を訓練して北朝鮮に送り込み破壊工作をする、いわゆる「北派工作員」である。軍籍がある人間を使えば休戦協定違反になるため、あえて使い捨ての部隊を作ったのである。韓国映画「シルミド」の題材となった空軍六八四部隊は、映画自体は誇張されているものの実在した部隊であった。

多くの北派工作員は韓国に戻ることができなかったが、北朝鮮の挑発を抑止することはできた。国際情勢の変化もあり北朝鮮側は韓国との話し合いに応じるようになり、南北の密使往来を経て一九七二年七月四日に相互不可侵・諍中傷の中止を謳った南北共同宣言の発表に至る。

結果的には一九六〇年代における挑発は人命の損耗と資源の浪費、そして韓国の北朝鮮への警戒心増大以外何の成果も生み出さなかったと言えるが、これはこの時期に限ったことではない。本稿では紙幅の関係上冷戦期に限定したが、例えばそれ以降の代表的な挑発、二〇〇二年の第二延坪海戦や二〇一〇年の天安撃沈・延坪島砲撃戦なども何の挑発も見えてこないものだった。結局はそれが北朝鮮の工作・挑発活動の本質であったとも言えるだろう。

■対日工作

なお、一九六〇年代には日本人拉致や日本への工作員浸透も頻繁に行われている。ここでは主な事件三件のみ述べておきたい。

①木村かほる失踪

特定失踪者（拉致の可能性のある失踪者）のうち一九六〇年二月二十七日秋田市の日赤高等看護学院寮を出たまま失踪した看護学生木村かほる（当時二十一歳）は北朝鮮での複数の目撃証言があり、特定失踪者問題調査会で「拉致濃厚」としているうちの一人である。木村の場合、失踪状況からして突然に襲われたとは考えられず、周辺に工作員ないし協力者がいておびき出されたと推定される。

②能代事件

一九六三年四月と五月に秋田県能代市の海岸に各一名、合計二名の工作員の遺体と武器・工作資金や水中スクーターなどが打ち上げられた事件である。侵入に失敗したものと推定される。

③寺越事件

能代事件の直後、一九六三年五月十二日に能登半島西岸の高浜漁港を出港した漁船に乗っていた寺越昭二・寺越外雄・寺越武志の三人が工作船と遭遇し、少なくとも外雄と武志は北朝鮮に拉致された事件である（昭二はその場で殺害されたと言われているが北朝鮮当局は北朝鮮で死亡したとしている）。なお、寺越外雄は一九九四年に北朝鮮の亀城市で死亡したとされるが寺越武志は現在も平壤に住んで日本の家族と連絡をとっており、拉致であることは明らかだが日本政府は家族の意向を理由に拉致認定をしていない。事件は偶然の出会いによるものと思われるが、単に発覚を恐れてということなら殺害すれば済むことであり、少なくとも2人を生きたまま連れて行くというのは当時から拉致が通常の活動として行われていたということであろう。

この三件だけでも分かるように一九五九年に帰還事業が始まり、一九六五年には日韓国交正常化が実現するという状況の中、北朝鮮からの工作活動は継続して行われていた。

4、一九七〇年代 日本との関係性における工作活動

前述のように一九七二年七月四日、韓国と北朝鮮の政府は突然共同声明を発表する。この時期は概ね南北の経済力が均衡した時期であり、それまでは日本時代のインフラに恵まれていた北朝鮮の経済力が高く、その後は韓国の経済発展により格差が広がっていった。経済的には対等な統一をするとなればこのときしかなかったが、経済以外の要因は全てがそれを否定していた。

共同声明に基づいて北と南で行われた赤十字会談を通じ南北双方は相手側への脅威をさらに感じるようになった。韓国側は北朝鮮の一糸乱れぬ統制に驚き、北朝鮮側は韓国の経済発展に驚いた。その後南北の関係は悪化し続けるが、相手側への脅威が最高指導者への権力集中をもたらしたの双方にとって「成果」だったのかもしれない。すなわち韓国はこの年十月に憲法改正を行い大統領への権限を集中させ、終身執権を可能にする「維新体制」を確立した。北朝鮮は翌十一月に憲法改正をしてそれまでの「首相」を「主席」にした。

■金大中事件

以後南北の対立は深まるが一九七三年八月八日に韓国の野党政治家金大中が東京都内のホテルから拉致され五日後にソウルの自宅近くで解放された「金大中事件」は日韓関係を決定的に悪化させた。逆に北朝鮮にとっては（あくまで相対的にはあるが）自らのイメージアップに寄与することとなった。

一九七〇年の安保条約改定反対闘争、いわゆる「七〇年安保」は終わっていたが日本の社会全体にはまだ左翼的風潮が強く、朝鮮総聯も強い組織力を持っており北朝鮮は韓国より好感度が高かった。そのような中で韓国が日本から野党政治家を拉致したわけだから国民の怒りは大きく、さらに自らの縄張りを荒らされた警察は韓国政府・中央情報部に対して強い嫌悪感を持った。この後日韓の治安当局の関係は一時断絶状態になった。

この事件の真相については今でも全てが明らかにならなかったわけではないが、もともと金大中を嫌っていた朴正熙に付度した中央情報部長李厚洛の指示で行われたというのが最も適切な見方ではないだろうか。現実問題として当時金大中には朝鮮総聯ルートないし北朝鮮から直接のアプローチ

がなされていたとされ、拉致される直前には韓国メディアの特派員すら会えない状況だった。

もちろんそのようなことは中央情報部の関知するところだったろうから、それを封鎖するという大義名分もあったろう。さらに言えば朴正熙の後継者を目指していた李厚洛の権力欲も影響していたと考えられるが、結果的にはこの事件によって金大中は国際的に知名度を得て「民主化のヒーロー」に祭り上げられ、一方で朴正熙は独裁者として批判の対象となった。膨大な労力をかけて結果は逆効果に終わったという意味では北朝鮮の工作活動と似た側面があるのかもしれない。

■文世光事件

一九七四年八月十五日、北朝鮮工作員に包摂され渡韓し、ソウルで開催された光復節（解放記念日）の式典会場に紛れ込んでいた在日韓国人青年文世光が朴正熙大統領を狙撃、大統領は演壇に身を隠して難を逃れたものの隣りにいた陸英修夫人が撃たれ死亡するという事件が起きた。強面の大統領と好対照の笑顔で国民の親しみを集めていた「国母」が日本からやってきた在日の青年に殺害された事件は

韓国社会には衝撃的であった。

狙撃に使われた拳銃は大阪市内の交番から盗まれたものだった。これだけでも日本に対する反発が強まるのは当然だが、事件から二週間後、八月二十九日の参議院内閣委員会で社会民主連合の田英夫参議院議員から「北朝鮮の武力的な軍事的脅威があるというふうには、日本政府はお考えになっているのかどうか、この点を伺いたい」と聞かれて当時の木村俊夫外相は次のように答弁している。

「北からの脅威があるかないかにつきましては、これは南の方が判断すべき問題でございます、日本政府としては、現在客観的にそういう事実はないと、こういう判断をしております」

この答弁はまさに火に油を注ぐものだった。ソウルの日本大使館にはデモ隊が乱入し、朴正熙は一時国交断絶も考えたという。一九七二年に日中国交正常化が実現した後、「次は北朝鮮」という雰囲気があったことや外相がリベラル志向の木村俊夫であったことも影響しているのだろうが、これによって北朝鮮は日韓関係を悪化させることのメリットを実感したであろう。

しかし一方、この事件もまた北朝鮮の意図は戦略的なもの

のではなく、単に「朴正熙を暗殺する」というだけのことだった。しかし、その結果は日韓関係の悪化という北朝鮮にとって予想外の「果実」をもたらした。

■工作機関の再編と日本人拉致

一九七〇年代前半に金正日は金日成の後継者となり、その後少しずつ父親から権力を奪い取っていく。工作機関を掌握したのは一九七六年であり、この時に工作員の敵区化（現地化）の指示が行われ、その後拉致が頻繁に行われるようになる。特定失踪者問題調査会のリストは一九四八年からあり（平本和丸）、このケースは引き揚げ後北朝鮮に残された母親の遺骨を持ち帰るため自ら北朝鮮に行った可能性もあるものの少なくとも拉致自体は一九五〇年代には始めていたと思われるが、この時期増えるのはやはり後継者と決まった金正日に付度したためではなかったのか。

■よど号事件と日本人拉致

日本人拉致の急増には北朝鮮側も想像していなかった事件が関わっている。一九七〇年三月三十一日、九名の共産同赤軍派が日本航空機をハイジャックした。いわゆる「よ

ど号」事件である。海外における日本革命の拠点を作ることを目的とするもので、計画自体は杜撰なものだったが北朝鮮は犯人を受け入れた。彼らの大部分は北朝鮮にやってきた日本人女性（いわゆる「よど号の妻」）と結婚し、それぞれが北朝鮮工作員として活動した。このうち森順子と若林佐喜子が関わったのが石岡亨及び松木薫の拉致（一九八〇年）、八尾恵と魚本（安部）公博が行ったのが有本恵子拉致（一九八三年）である。

自らハイジャックしてまでやってきた日本人を北朝鮮側はどのように考えたのだろうか。よど号グループ関係者だけが住む「日本人村」を作り、今日に至るまで生活を保障してきたことだけ考えても利用価値があると考えたことは間違いない。そして金日成の周辺の人間は（もちろん金正日も含め）「偉大な首領様を慕って日本人がやってきた」と金日成に伝えたい。あくまで推測ではあるが、「金日成同志は世界に無比の偉人であり、主体思想は最高の思想である。従ってどのようなやり方であれ連れてきさえすれば皆従い、幸せになる」という発想につながっていったのではないか。それを拉致に関わった当事者が本当に信じていたかどうかは別として。

■金正日が利用した日本映画

上に対する忖度という意味では、実は北朝鮮の一九七〇年代以降の工作活動において、日本映画「陸軍中野学校」の果たした役割も注目すべきである。「陸軍中野学校」は一九六六年から五作が制作された市川雷蔵主演の東映映画。実在した陸軍の諜報機関を題材にしたスパイ映画であり、そこに描かれていた様々な工作活動については事実と大きくは異なっていないとされる。⁷⁾

金正日が一九七〇年代中盤、工作機関を掌握するにあたって、事前に工作活動の実績があったとは思えない。もちろん人事権を握るのだから絶大な力はあるのだが、具体的に内部を変えていくためにはそれまでと異なる新機軸が必要となる。そこで使われたのが陸軍中野学校だったのではないか。

映画に強い関心を持つ金正日にとってそれを自らのアピール材料とする事は十分に考えられることだろう。逆に担当者は金正日に忖度してこの映画を活用した。実際一九九〇年に亡命した元工作員安明進は筆者に陸軍中野学校のシーンをスライドにしたものが工作員養成期間である金正日政治軍事大学の中で使われていたと語っていた。

拉致被害者曹我ひとみも北朝鮮の招待所でこの映画を見たと言っている。

特にこのシリーズの二作目「雲一号指令」（森一生監督）では村松英子扮する芸者が実は日本人になりました工作員という設定で、これが工作員の現地化、そして日本人の拉致と身分を盗用する「背乗り」につながったのではないか。

■日本人拉致急増も「忖度」の産物か

一九七〇年代中盤に金正日は工作機関を掌握するが、この時期は日本時代に教育を受け自由に日本語を扱いたた日本人として活動できる工作員が次第に高齢化していったときだった。金正日は工作員現地化のために日本人を連れてくるように指示し、担当者は新たな指導者に忖度すべくこの時期拉致が急増する。

例えば一九七八年、政府認定拉致被害者だけでも事件は次のように集中している。

- (1) 六月六日 神戸市内から田中実を拉致（この日成田空港からウイーン経由で北朝鮮に）
- (2) 六月十二日 東京都内から田口八重子を拉致

(3) 七月七日 福井県小浜市で地村保志・浜本富貴江を
拉致

(4) 七月三十一日 新潟県柏崎市で蓮池薫・奥土祐木子を
拉致

(5) 八月十二日 鹿児島県吹上町で市川修一・増元るみ子
を拉致

(6) 八月十二日 新潟県真野町で曾我ミヨシ・ひとみを
拉致

(7) 八月十五日 富山県高岡市でカップルの拉致未遂

このうち(1)は工作機関「洛東江」による事件、(2)は工作員李京雨(通称宮本明)らによるものである。(3)から(7)は全て類似の手法による複数人の拉致であり、時期が近接しているのでそれぞれが別途のオペレーションであったと推定される(但し移送に使われた作戦部の運用する工作船は同じものが複数回使われた可能性がある)。

これだけの集中は何を意味するのだろうか。おそらく当初よど号グループを念頭に日本人工作員を作ろうとして、それがうまくいかないで田口八重子のように工作員の養成係にしたのだろうが、一つのオペレーションでも事前の

対象者選択や誘導ないし待ち伏せと、身柄確保後の移送、そして工作船の運用など膨大な労力がかかる。拉致した後
の教育や、それが成功したとして運用する手間を考えると
これだけの日本人拉致を行うことの意味が分からない。結
局は様々な工作機関が金正日の覚えをめたくするために
無差別に近い拉致を行ったと考えるのが適当なのではない
だろうか。日本と北朝鮮の間は工作船を使う限り作戦部の
業務だが、日本国内での対象者選定や誘導、待ち伏せに関
しては各機関がそれぞれのルートを使って行ったと推定さ
れる。

この拉致の集中は(7)が未遂に終わったことからとりあえ
ず中止されたようだが、特定失踪者でも複数人(カップ
ル・夫婦・友人)の失踪はほとんど一九七〇年代に集中し
ており、当時はそのような拉致が指示されていたものと思
われる。なお拉致自体この時期に多いとはいえずその後も後
も続いており、これはもはや何らかの戦略に基づくもので
はなく、北朝鮮という国家の習性に近いものだとと言えるだ
ろう。日本の政府認定拉致被害者のうち欧州での拉致を除
いたケースの大部分は上記(1)～(6)なので日本人には「海岸
近くで突然襲われて袋を被せられて」というのが拉致の典

型と受け取られているが現実には逆にこの時期の拉致が特殊なケースであることも考えられるのである。

5、一九八〇年代 金正日主導による冒険主義と孤立化

一九七九年十月二十六日、朴正熙は側近である中央情報部長金載圭に暗殺される。大統領権限代行は憲法に基づき國務総理崔圭夏が就任、その後選挙を経て崔圭夏は正式に大統領になる。一九七二年以来非常事態的に自由を制限してきた「維新体制」の軛から逃れた韓国社会は民主化の聲が高まり、一九六八年チェコスロバキアで起きた民主化運動「プラハの春」になぞらえて一九八〇年春は「ソウルの春」と言われた時期だった。

そのような中で五月十七日、全羅南道の中心光州市で暴動が起こり、それを鎮圧するために投入された軍との衝突で多数の死傷者が出た。いわゆる「光州事件」である。当時北朝鮮作戦部の戦闘員であった筆者の友人李相圭はこれに介入するための出動待機状態にあったが、結果的には早期に鎮圧されたため出動は取り消しになった。前年一九七九年十二月十二日の肅軍クーデターで権力を掌握し

た当時の保安司令官全斗煥は一九八〇年九月に大統領に就任、その後の韓国は治安も安定し経済も順調に発展していた。一九八一年九月には一九八八年のオリンピックをソウルで開催することが決定した。

■ラングーン事件

経済で韓国に差を付けられ、国際的にも孤立化していくのに対して北朝鮮が行ったのが一九八三年十月九日、ビルマの首都ラングーン（現在ミャンマーのヤンゴン）を訪れた全斗煥を暗殺しようとして行った、いわゆるラングーン事件である。建国の父とされるアウンサン将軍廟の参拝を狙って爆殺を企図したが到着が遅れた全斗煥は難を逃れ、その代わり先に到着していた副首相ら二十一人が死亡した。

この事件ではまもなく犯人が逮捕され北朝鮮によるテロと明らかになる。結果的に北朝鮮は国際的立場を悪化させ、韓国民の反発の裏返しで全斗煥政権への支持を高めただけだった。ちなみに前述の元工作員李相圭はこの二か月後、一九八三年十二月三日韓国釜山の多大浦海岸に上陸後他の工作員一名とともに生け捕りにされた。本人の証言によれば事前に侵入していた工作員が転向しており、自分たちの

上陸は最初から韓国側に分かっていたとのこと。しかしラ
ングーン事件の直後だったため生け捕りにして証言させる
のが至上命令で、そのため前述の北派工作員を訓練して取
り押さえたという。

■大韓航空機爆破事件

一九八七年十一月二十九日、中東からソウルに戻る大韓
航空機が内部にしかけられた爆弾によりインド洋上で爆
発、墜落し乗員乗客一一五名全員が死亡した。爆弾をしか
けて途中寄港地のアブダビで降りた北朝鮮工作員金勝一・
金賢姫はバーレーンで身柄を拘束され金勝一は自殺、金賢
姫は自殺を図ったものの阻止され、その後韓国に移送され
た。翌一九八八年一月十五日、金賢姫は記者会見で事件の
全容について語り、自分が「李恩恵」と呼ばれた拉致被害
者の日本人女性から日本語や日本の風習を教わったことを
明らかにした。この李恩恵は後に一九七八年六月十二日都
内で失踪した飲食店従業員田口八重子であることが分か
り、それがもとで第一次日朝正常化交渉は頓挫するのだ
が、そもそもこの事件はソウルオリンピックへの参加国を
減らすために行ったことであり、結果は全く逆効果でしか

なかった。

6、おわりに

以上冷戦期までの北朝鮮の対南・対日工作と挑発事例に
ついて見てきた。もちろん北朝鮮が起こした事件は非常に
多く、一本の論文だけでまとめることは不可能である。本
稿ではいくつかの事案を取り上げて概観するにとどまって
おり、それらから帰納的に結論を導き出したもので限界が
あることは間違いない。

しかしそれでも、今回取り上げた事件のどれを見ても、
「いかなる戦略に基づいていたのか」という疑問を感じる
ものばかりであることは理解いただけると思う。朝鮮戦争
が引き分けて終わり、米軍が駐留を続け、さらに韓国との
格差が広がる中で、「対南武力解放」という本来の国家目
標はどうやっても達成不可能であった。また後見人たる中
国・ソ連も再度の戦争によって自分たちが巻き込まれるこ
とは嫌っていた。できることが極めて限られた中では戦略
の存在する空間はなかったと言つてよい。

ならば北朝鮮はどうして工作活動や挑発を続けたのか。

もちろん基本的には韓国より上に立ちたいという意志あるいは特に一九七〇年代以降韓国に差を付けられていくことへの焦りがあったからだろうが、根本的な問題として統一という看板を下ろせば政権の正統性すら失う可能性があったからではないか。だから少なくとも形式的には工作活動を続けていかなければならなかったということだろう。そしてとりあえず目指していた在韓米軍撤退と親北勢力の拡大のうち後者は成功し、三回にわたって親北政権の樹立を果たすことができた。

しかし、もともと想定していたのは保守政権の下で反政府活動を活発化させ、それに乗じて南侵をするということであり、政権が親北であれば反政府活動は意味がなくなる。そして逆に親北政権の成立は南北の交流を進めることとなり、北朝鮮当局の最も嫌う情報の流入へとつながっていった。人口の五パーセント、一〇〇万人以上と言われる過大な軍事力の維持や昨今のミサイル「乱射」も含め、人的物的資源を対南工作・挑発活動に投入したあげく北朝鮮は自家撞着に陥ってしまった。その結果が統一を放棄し韓国を敵「国」と見なすとした二〇二三年末からの方針転換に象徴されているのではないか。

最後に付言しておきたい。無意味とはいえ日本は北朝鮮の工作活動の温床であった。外事警察をはじめ関係機関ではそれを防ぐため努力を続けたが、日本政府としては立法にも具体的対処にも極めて消極的だった。そしてそれが結果的には長年にわたり拉致を許すことになったのである。

さらに、拉致問題をクローズアップさせた安倍政権をふくめ、二〇〇二年の小泉訪朝以降全ての政権のめざしたものは拉致被害者の「帰国」であって「救出」ではない。北朝鮮の工作活動は北朝鮮の本質のみならず、被害を受けてきた国民に対し警鐘も鳴らさず、十分な対処もしなかったという意味で安全保障を米国任せにしてきたわが国の本質の一端も明らかにしたと言えるのではないか。

- 1 「朝鮮通信」ホームページ（原文朝鮮語）<http://www.kona.co.jp/index-kr.htm> アクセス二〇二四年八月二十九日
- 2 北朝鮮で最も有名な軽音楽のアンサンブル「普天堡電子楽団」はここから名前をとっている。
- 3 ジェロルド・シエクター ヴァチャエスラフ・ルチコフ編『フルシチョフ 封印されていた証言』（章思社・一九九一年）一三六頁
- 4 ストロープ・タルボット編『フルシチョフ回想録』（タイムライフブックス・一九七二年）三七二頁

- 5 現在も当時の状況を伝える「李承福記念館」がある。結果的には北朝鮮のゲリラ派遣は自らの拠点ではなく北朝鮮への敵対心を強める拠点を作ってしまったと言える。
- 6 田中明・元拓殖大学海外事情研究所教授（故人）が当時の韓国メディアで東京特派員から聞いた話
- 7 拓殖大学卒で中野学校出身者だった狩野誠氏（故人）の証言。
- 8 元工作員案明進は「手当たり次第に連れてきたら適性のない人間がいたのでその後は選別して連れてくるようになった」と言っていた。
- 9 本人の証言。李相圭は韓国で拘束された後転向し政府系のシンクタンクに勤務し北朝鮮情報の分析などを行った。